イタリア庭園とドイツ・ロマン派文学（S. Kuwahara）[J]

今夏 10 日ほどイタリアを旅してきた。その目的の一つが、教皇の町ヴィテルボ Viterbo 郊外のバニャイーア Bagnaia にあるランテ荘庭園 Villa di Lante とボーマルツォ Bomarzo のいわゆる怪物庭園を見ることであった。

ヨーロッパの庭園を見歩くようになってかれこれ 15、6 年になるであろうか。きっかけはアイヒェンドルフ文学である。『予感と現前』*Ahnung und Gegenwart* (1812 年に成立)第 21 章に一つの庭園描写がある。そこに描かれているのはイギリス風景式庭園の中でもピクチャレスク庭園と呼ばれるものである。最初はアイヒェンドルフの空想の産物と思っていたのだが、その迫真性にもしや実際にあったのではなかろうかと思い始めたことから庭園関係の本を漁り、ついには自分の目で確かめようと一念発起したのだった。よく知られているようにイギリスで 18 世紀初めに庭園革命が生じ、王侯貴族階級の象徴とされた整形式のバロック庭園に代わり、市民階級の美学、すなわち「自然」を表象するイギリス風景式庭園が造園されることになる。ドイツでは 1764 年に着手されたヴェルリッツ庭園 Wörlitz が最初のイギリス風景式庭園といわれている。しかしながら自然は直線を嫌うというウィリアム・ケント William Kent の言葉とは裏腹に、自然は退屈とばかり風景式庭園の中に中国風パゴダやムーア様式建築、果てはピラミッドを、しかも縮小サイズで建てる庭園が多く造られることになる。それが『予感と現前』に描かれていたピクチャレスク庭園である。キャプテン・クックの第一回航海に同行し、後にはロイヤルソサエティ会長として世界中の珍しい植物をプラントハンターたちに蒐集させたジョセフ・バンクス Joseph Banks の肝いりで植物園が拡充されていったロンドンのキュー王立植物園 Kew Royal Botanical Gardens、バッキンガムシャーにあるストウ庭園 Stow Landscape Garden、フリードリヒ大王の姉ヴィルヘルミーネ Wilhelmine が造園したバイロイト庭園、フリードリヒのサンスーシー宮殿庭園、時代が下って 19 世紀に入り、旅行記作家としてまたアイスクリームにその名を残すピュックラー・ムースカウ侯爵 Fürst von Pückler-Muskau のコトブス近郊のブラーニッツ庭園 Branitz 等至る所にピクチャレスク庭園の名残を見いだすことができる。

しかしドイツ・ロマン派の文学を読み進むにつれ妙なことが気になり始めた。ロマン派は一般に自然を賛美したといわれ、それは必ずしも間違っていないのだが、ロマン派の時代の文学ではイギリス風景式庭園は不評である。ピクチャレスク庭園を皮肉ったアイヒェンドルフ、『予感と現前』の少し前に書かれたゲーテの『親和力』（1809 年）が良い例だろう。ノヴァーリスはある断片の中でイギリス風景式庭園を「楽園の模倣」と記しながら作品（『ハインリヒ・フォン・オフターディンゲン』）の中では自然を模した庭園ではなく、幻想人工庭園を描く。アイヒェンドルフ詩の傑作の一つである「廃園」*Der alte Garten*

（初出は“*Die Entführung*”、1838 年）は整形式庭園、以前はロココ庭園と考えていたが恐らくはイタリア庭園を題材としている。ブレンターノの『ゴッケル物語』（初稿、1816 年頃成立）ではゴッケルの娘ガッケライアの美しい庭は小さな整形式庭園である。大げさに言えば、この事実が意味するのは何かを問うためにイタリア庭園を見て回ることになったのである。

前置きが長くなった。ランテ荘は 2005 年に一度見に行ったことがある。しかしその時には近くにあるにもかかわらずボーマルツォ庭園には行くことができなかった。今回はその恨みを晴らすためにローマとフィレンツェのほぼ中間にあるオルヴィエート Orvieto、白ワインと、あのフロイトが愛し『日常生活の精神病理学』（1901 年）を書くきっかけとなったルネサンスの画家ルカ・シニョレッリ Luca Signorelli のフレスコ画『最後の審判』を抱くドゥオモ（フロイトとこの町およびイタリアとの関係について知りたい方には岡田温司氏の優れた著書『フロイトのイタリア』をお勧めする）で有名な町から、少々高くついたが車を出してくれるサービスを受け、二つの庭園を見て回ることができた。ボーマルツォの怪物庭園は今では半ばテーマパーク化しているがそれでも結構楽しめる。この庭園については澁澤達彦以来、日本では随分と紹介されているのでそちらを参照していただくとして、ドイツ語圏で出ている本を一冊だけ挙げておきたい。若きブレーデカンプ Horst Bredekamp がテクストを執筆した『ヴィチーノ・オルシーニとボーマルツォの聖なる森』*Vicino Orsini und der heilige Wald von Bomarzo*（初版 1985 年）である。オルシーニ公の伝記とこの庭園の図像学的解釈をブレーデカンプが担当した本であるが、長い忘却の末 1983 年に開園した当時のボーマルツォ庭園の姿を建築写真家ヤンツァーWolfram Janzer の写真で見るのも楽しい一冊である。

さてランテ荘庭園である。まずは写真を見ていただきたい。その美しさの一端がお判りいただけよう。1581 年 9 月末日にこの庭園を訪れたモンテーニュ Michel de Montaigne は、ランテ荘庭園がエステ荘よりもまたプラトリーノのメディチ家のヴィラのそれよりも美において凌駕していると自らの『旅日記』に記している。この庭園は 1573 年ないしは 1574 年に枢機卿ガンバラ Gianfrancesco Gambara によって造園が開始された。（ランテ荘の名は 17 世紀にランテ家の所有となったことに由来する。この庭園にある紋章はガンバラの名に因んで「エビ」である。（以下、ランテ荘については Fritz Barth: Die Villa Lante in Bagnaia, 2001 に、ボーマルツォ庭園については先に記したブレーデカンプの書、エステ荘については David R. Coffin: The Villa d'Este, 1960、イタリア庭園全般については Claudia Lazzaro: The Italian Renaissance Garden, 1990 に主に拠る。）設計は建築家ヴィニョラ Giacomo Barozzi, gen. Vignola であったろうと推定されている。同時期に造園が開始された庭園にはエステ荘（1565 年頃）、ボーマルツォ庭園（1560 年頃）がある。ボーマルツォを除く二つの庭園はどちらも枢機卿の夏の離宮の一部として造られている。エステ荘の主人は言わずと知れたフェッラーラのエステ家のイッポリット二世である。今まで漠然とイタリア庭園と記してきたが、これらは造園された年代を見れば判るとおりマニエリスム期に属する庭園である。ボーマルツォ庭園はその迷宮性と謎によってマニエリスムを代表するものであり、またエステ荘庭園はその無数の噴水のみならず、デュペラク Étienne Dupérac による 1573 年の銅版画を見る限り、幾何学的構成にもかかわらず全体として迷宮のイメージを喚起する。この二つと較べるとランテ荘庭園は一見すると幾何学的秩序がより強調されているように見える。しかしこの庭園には「楽園」を主題とする一篇の詩が、一つの物語が隠されている。

ランテ荘庭園は、多くのイタリア庭園と同様、山の斜面を利用して造られており、二つの部分よりなる。

西側はバルコ barco と呼ばれる自然庭園部であり、東側は「イタリア式庭園」giardino all'italiana と呼ばれる整形式庭園部である。自然庭園部の入り口にはペガサスとムーサイの泉が置かれ、この庭園の主題を表している。詩神と天馬が天翔る楽園、それはヘリコン・パルナス（ペガサスの蹄によって、すべての詩人がそれを飲むことによって詩想をえるといわれるヘリコンの泉が湧いたという）、そして人間の黄金の時代（ヘーシオドス）の象徴である。

それに対して、自然庭園部に続く東側の整形式庭園部は自然に代わる「人工・文化」の世界を表す。北側の谷へと傾斜してゆく面を三つのテラスに分割し、一番上のテラスにムーサイの柱廊と「洪水の泉」fontana del diluvio があり、そこから流れる水は谷に向かって「エビ」と「ホタテ貝」の装飾を施された、細いカスケード catena を下り、「巨人の泉」と「光の泉」を通り、一番下のパルテールにある、ジャンボローニャ Giambologna 作「ムーア人の噴水」（噴水の彫像の色が褐色であることから誤って名づけられたという）に至って天に向かって勢いよく水を噴き上げる。「洪水」はデウカリオンの洪水であり、同時にノアの洪水を意味する。中世ではペガサスはキリストの乗り物と解釈されたともいう。こうしてみるとランテ荘庭園はルネサンスの伝統を受け継ぎ、ギリシア神話とキリスト教を結びつけ、楽園と人間の堕落、そして人間の再生と楽園の復活という物語を「水」を介して密かに語っていることになる。水・噴水はイタリア庭園の十八番であり、それは夏に涼をとるという実際的な理由から使用されたものであることは当然であるが、それには四大の一つとして神話的意味、すなわち姿を自在に変え破壊しつつもなおかつ楽園へと再び導くもの（「洪水の泉」から「ムーア人の噴水」へ）としての意味が込められてもいるのである。

この物語自体はイタリア・ルネサンス庭園、マニエリスム庭園に珍しいものではない。ランテ荘庭園を際立たせているのはこの物語が、広大なバロック庭園あるいはイギリス風景式庭園とは異なり、山の斜面という限定された土地に、凝縮され、洗練の極みに達した形式で表現されていることである。（ランテ荘整形式庭園部の奥行きは 234 メートルである。）ペガサスとムーサイで始まるこの庭園の物語に従って読むならば「洪水の泉」の次にある「イルカの泉」fontana dei delfini の背後にはアリオン伝説（ヘロドトスが伝えノヴァーリスが『ハインリヒ・フォン・オフターディンゲン』第二章のメールヒェンにおいて利用した話である。さる高名な詩人が船で目指す土地に向かっていたところ船人が詩人のもっている宝石や高価な品々を奪おうとする。詩人は最後に辞世の歌 Schwanengesang を歌わせてくれと頼み、歌い終わると海に入った。すると歌に感謝したイルカたちが現れアリオンを背に乗せ無事に目的地に連れて行ったという）があるだろうし、「光の泉」fontana dei lumini はアポロン（アポロンはもともと竪琴、音楽の神であった）を指し示しているだろう。そして一番下のテラスにあるツゲの植え込みによる幾何学的模様のパルテール parterres de broderie（giardino という語がフランス語の jardin のネオロギスムスであることを最近田之倉稔氏の『林達夫・回想のイタリア旅行』で知った。カテリーナ・ディ・メディチのフランスへの輿入れに象徴される両国の関係は予想していた以上に深いもののようだ）は、その精緻な幾何学性によってピュタゴラスに遡るマクロコスモス・ミクロコスモスの照応関係を表現していると考えることもあながちこじつけとも言えないであろう。

ランテ荘庭園に見られる凝縮されたアレゴリーは図らずもバシュラールの言葉を思い起こさせる。彼は言う、「巧みに世界を縮小できればできるほどいっそう確実に世界を所有」でき、「ミニアチュールにおいては、価値は凝縮し、豊かになる」と。そういえばゲーテの「新メルジーネ」のエックヴァルト王の夏の離宮は持ち運び可能なものであったし、王女は「水の精」とされていた。東洋においても壺中天の故事があり、盆栽の伝統がある。造り込まれた小さなもの、とりわけ庭は、洋の東西を問わず、「楽園」を指し示しているもののようである。イギリス風景式庭園全盛の時代にドイツ・ロマン派の人たちはこの凝縮された楽園のイメージを密かに作品の中に、とりわけメールヒェンの中に書き込んでいたのではないだろうか。ノヴァーリスを始めとしてロマン派の時代の人々の作品の中には楽園を指し示す美しい小さな庭園がちりばめられているのである。プルースト M. Proust は『失われた時を求めて』第一篇のあの有名な「マドレーヌ」の箇所の直前にケルト人の信仰について触れ、死者たちの魂は人間以下のものの中にとらわれているが、時が来て愛する者が通りかかると死者の魂は喜びにうちふるえて呼びかけ、そして再認されると愛する者のこころに生き返るという印象深い文章を残しているが、ロマン派の時代の人々の描いた庭園も読者に再発見されることを待ちわびているように思われる。そのとき庭園は少なくとも楽園を指し示すものとして私たちの心に蘇るように思われるのである。

桑原 聡　（新潟大学）

0078

作成日：2011/10/24